２０２４．４．７．主日礼拝説教

**聖書： マタイによる福音書10章1～4節**

**『選ばれる意味』**

「十二人を選ぶ」という小標題が掲げられます。9章を以て、イエス自身がメシアとして人々に直接働きかけるブロックはひとまず終わりました。この10章から始まる新しいブロックの冒頭は「選びと派遣」です。ここでは福音というまったく新しい価値基準の訪れの知らせをさらに広く伝えるために弟子たちを送り出す記事から始まります。1節に述べられているように「あらゆる病気や患いをいやす」ことが可能になった弟子たちを遣わすのです。　この表現はすでに9;35にイエスの活動として記されています。つまり、ここでの弟子たちはイエスと同じ使命に携わり、同じ権威(他者と共に生きる力)を得ています。こうした任務と権威を授けられた弟子たちとは「教会」を意味するのだとマタイは主張します。マタイにとって教会とはイエスの継承体なのです。ここで送り出される12人はいわば初代教会そのものであって、その後の教会をも意味するのです。

さて、本日の箇所は「十二人を選ぶ」と言いながら、マタイが選んだ弟子たちですでに記事の中に登場した弟子はまだ5人だけです。並行箇所のマルコ3;13-19とルカ6;12-16でも、同じように細部は異なるとはいえ、まだ登場していない名前が羅列されます。なぜ福音書記者たちは数を掲げる限り、登場人物に裏打ちされた弟子たちを記さなかったのでしょうか。実際には弟子たちはもっとたくさんいたことでしょう。その中から12人を選ぶという作業は福音書記者たちにとって現代のわたしたちが考える数の選びとは少し異なってました。12という数の由来は旧約の昔に遡ります。イスラエルの部族の数に端を発しているのです。ですから、12人の弟子たちから出発した教会とは、旧約から新約への恵みの引き継ぎを意味しています。ですから福音書記者たちにとってはそれは象徴的な数字であるから5人でも何ら構わなかったし、細部が少々異なっていてもお構いなしということなのでしょう。

ただマタイの特徴は、マルコやルカでは一人づつ明記されていますが、マタイでは二人一組で記されているという点でしょう。これは当時の初代教会の二人一組で伝道に送り出した経験が反映されているようです。また、ペトロには「まず」と記されます。これは「第一に」という意味です。おそらくマタイの所属していた教会が、ペトロに対して特別な敬意が払われていたことを意味しているのだと思います。

マタイは人物名を列記するに留まらず、二人一組という表現を通して、「選びの意味」とはその行為であるということ、つまり、マタイは「選ばれた人とは、その人が誰と共にどのように生きるかという問われある人生への踏み出し」なのだということを描くのです。

わたしたちは必ず誰かに助けられて生きているのに、この助けてくれる人がよく見えないものです。自分が助けている人は見えても、助けてくれる人が見えないのです。人間の成長する表現には、思いやり深いとか優しいとかいろいろあるのですが、決定的なのはこの点なのです。助けてくれる人が見える、ここに「選ばれる意味」があるのです。イエスの十字架と復活とは「イエスの側からあなたと共に歩もう」という招きです。このことに応えて行くとき、わたしたちにはイエスが助けて下さる主であることを感謝をもって告白することが初めて可能になるのです。ここに「選ばれる意味」があるのです。